

## 沈從文の初期創作に見られる思想

—一九二四年—一九二六年(六)

黄 媛 玲

### 劉夢葦と沈從文と詩人たち

現在確認できる沈從文の最初の作品、「一封未曾付郵的信」の中で、主人公從文は自分の境遇を次のように形容している。

我成了一張小而無根的浮萍，風是如何吹—風的去處，便是我的去處，湖南—四川—我如今竟又到這死沉沉的沙漠北京了。

風の吹くままに漂泊する浮草のごとき沈從文がようやく辿り着いた沙漠北京での生活に、少しずつ、文学青年達との交流の輪が広がるにつれて、潤いが増していく。沈從文の北京における創作中の詩の分量はその後の如何なる時期に比しても大きかった。その背景には、漂泊の詩人劉夢葦との交遊があった。

身寄りがなく、志半ばにして早世した詩人劉夢葦についての伝記的資料が非常に乏しいため、彼の足跡と彼の人物像を知るには、彼自身の作品がほとんど唯一の信頼できる資料となる。以下に、筆者の調査による彼の作品目録を掲げる。

執筆日	作品名	ジャンル	掲載誌	掲載日	署名	執筆地
可—否		詩	民國日報・覺悟	二二・十一・二三	夢葦	

二四·九·七	青年必讀書	龍蟠山的黃昏	可憐的中國人	自慰	五一的狂歌 (贈湖南工友們)	年年的五一	最後之夢	一夜	吻之三部曲	奈何	故鄉	雖說如此	誘惑	離別吟	代表	假如我是這麼想	禱告	自由之花	自由之花	
文	詩	文	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	文	詩	小說	詩	詩	
京報副刊	京報·民衆文芸十三	時事新報·學燈	詩第二卷第二号	五一紀念號	湖南學生連合會週刊 五一紀念號	湖南學生連合會週刊 五一紀念號	創造第二卷一號	創造第二卷一號	創造第二卷一號	學匯四三	學匯四三	學匯四二	學匯四一	學匯四十	學匯四十	民國日報·婦女評論五二	民國日報·覺悟	民國日報·覺悟	民國日報·覺悟	勞工週刊十四
二五·四·三	二五·三·十七	二四·五·九	二三·五·十五	二三·五·一	二三·五·一	二三·五·一	二三·五	二三·五	二三·五	二二·十二	二二·十二	二二·十二	二二·十二	二二·十二	二二·七·二六	二二·五·八	二三·五·四	二二·二·五	二二·一·十七	
劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	夢葦	葦葦	夢七	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	夢葦	
	南京龍蟠山																			

							二五·八·十八	二五·八·十										二五·七·六				二五·五·二三			二五·三·十二					二五·四·十八
寫給瑪麗雅	寄語死者	『我所需要的不是愛情』	中國詩底昨今明	歌	愛苗	賢妻良母之女子教育	洞庭落日	倚門的女郎	美麗的姑娘	寶劍底悲痛	初中國語教學意見	淚雨淋淋	在“醒”和“新”的旗幟之下	初中國語教育及漢字問題	國家主義與愛國主義	竹林深處	我們底新歌——為少年旬刊作	國語運動底附帶問題	故宮桃李											
詩	詩	詩	文	詩	詩	文	文	詩	詩	詩	文	詩	文	文	詩	詩	文	詩												
晨報副刊·詩鐫一	晨報副刊·詩鐫一	晨報副刊	晨報副刊	晨報副刊	京報·婦女週刊四二	京報·婦女週刊四二	晨報副刊	京報·莽原週刊二二	京報·婦女週刊三八	晨報副刊·新少年旬刊六	京報·國語週刊十二	京報·文學週刊三二	京報·國語週刊九	京報·國語週刊七	晨報副刊·新少年旬刊二	京報·莽原週刊十三	晨報副刊·新少年旬刊二	京報·國語週刊四	京報·文學週刊一二											
二六·四·一	二六·四·一	二六·三·十三	二五·十二·十二	二五·十·七	二五·九·三十	二五·九·二三	二五·九·十三	二五·九·十一	二五·九·二	二五·八·二八	二五·八·二三	二五·八·二二	二五·八·九	二五·七·二六	二五·七·十八	二五·七·十七	二五·七·八	二五·七·五	二五·五·三十											
劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	孤鴻	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦	劉夢葦											
						孤鴻室	孤鴻室	北河沿			在南京時寫				南京清涼山古林寺		寫於晨光熹微的時候													

二六·四·一	萬牲園底春	詩	晨報副刊·詩鑄三	二六·四·十五	夢葦	北京
二六·四·十四	鐵道行(新稿)	詩	晨報副刊·詩鑄三	二六·四·十五	夢葦	北京
二六·四·十四	最後的堅決	詩	晨報副刊·詩鑄四	二六·四·二二	夢葦	北河沿畔
二六·四·十	妻底情	詩	晨報副刊·詩鑄四	二六·四·二二	夢葦	北河沿畔
二六·四·二六	雪夜	詩	晨報副刊·詩鑄五	二六·四·二九	夢葦	第一個春雨之夜追寫舊情
二六·四·二六	四行詩	詩	晨報副刊·詩鑄六	二六·五·六	夢葦	
二六·四·二六	生辰哀歌：遙寄我底媽媽	詩	晨報副刊·詩鑄六	二六·五·六	夢葦	
二六·四·十三	思婦底春	詩	晨報副刊·詩鑄八	二六·五·二七	劉夢葦	寫於都門春色中
二六·五·十一	希望	詩	晨報副刊·詩鑄九	二六·五·二七	夢葦	
二六·春秒	北河沿底夜	詩	晨報副刊·詩鑄九	二六·五·二七	夢葦	
二六·五·十一	致某某	詩	晨報副刊·詩鑄九	二六·五·二七	夢葦	
二六·五·二一	示嫻	詩	晨報副刊·詩鑄十	二六·六·三	夢葦	
二五·十一·九	觀醉	詩	現代評論第四卷第八十期	二六·六·十九	夢葦	寫於孤鴻室
二六·六·八	離別之前	詩	現代評論第四卷第八十期	二六·六·十九	劉夢葦	黃海舟中追寫
二六·五·十一	無題	詩	小說月報第十七卷八号	二六·八·十	劉夢葦	北河沿
二四·八·二六	愛與劫(呈YY)	詩	晨報副刊	二六·十·六	夢葦	
二四·八·二六	渴望的玫瑰	劇本	世界日報·文學	二七·四·二九	夢葦	寫於清涼山之杏院

一二八	慰語	四、五、六、七	一五・二十	劉夢葦
	詩	世界日報・文學十九	二七・八・十二	

この年表によれば、彼が沈從文のいる北京にやってきたのは、一九二四年九月から一九二五年三月の間である。二度目の北京で劉夢葦が最初に詩作を発表したのは、胡也頻らの主宰する『民衆文藝週刊』第十三号であり、その前の第十二号（一九二五年三月十日刊）には、沈從文の「狂人書簡——與X・與蘋兒・與小栗」が載っていた。つまり、胡也頻が沈從文の作品を初めて採用し、沈從文の下宿を訪ねてきた直後に、今度は『民衆文藝週刊』に劉夢葦の作品を載せたことになる。このころには、この三人は知り合いになっていたと考えられる。さらに言えば、もう少し前に創作された沈從文の「小草與浮萍」（二月十四日作）という作品は、劉夢葦と沈從文の出会いを彷彿とさせ、胡也頻と知り合う前に沈從文は劉夢葦と知り合っていたかもしれない。「浮萍」は沈從文自身であり、「小草」は劉夢葦だ。漂泊のわが身の不幸をかこつ「浮萍」に、「小草」が慰めの声をかける。

『小萍兒、漫傷嗟、同樣飄泊有楊花。』

這聲音既很溫和、又復清婉、正像春風吹到他背後時一樣・是一種同情的愛撫。

作品中の「小草」が女性の設定となっているのは、友人たちの劉夢葦についての形容から浮かぶ、清楚な顔立ち、いつも静かな微笑みをたたえる劉夢葦の姿から考えれば、容易に思いつく設定である。そして、現実の世界においても、沈從文は彼の女性に近い優しさや春風のような暖かさに慰めと心の潤いを得たに違いない。

『有一次、……跑來一位詩人……我一見他那尖瘦有毛的臉嘴、就不高興……又是長長的眉毛、又是嶄新的綠森森的衣裳、又是清亮的嗓子；真惹得那一羣不顧羞耻的輕薄骨頭發顫！……』

『那不是鶯哥大詩人嗎？』……

「嘘！詩人、單是口齒伶俐一點、簡直一個寰薄兒罷了！我分明看到他棄了他居停的女人、飛到園角落同海棠偷的交接吻。」

「小草與浮萍」という寓話の創作は、沈從文が當時読んでいた『小物件』（『プチ・シヨーズ』アルフォンス・ドーデ作）の中の田園詩劇から着想を得ているように思われる。家庭が没落し、貧乏で病弱、見た目がみすぼらしいために、何処へ行っても馬鹿にされ、詩の創作によって身を立て家の復興を夢見る主人公。ドーデの『小物件』の主人公は、北京の現実の自分たちと重なる。そして、何よりも、ドーデの『小物件』は、辛い境遇にいる小人物たちの哀樂を丹念に描くこと、軽快な筆致と人情に悖らない風刺によるその書き方が彼ら小人物の心をかえって慰めることができることを教えてくれたのである。「小草與浮萍」において、二人の会話が、感傷に陥ることなく、むしろ天真爛漫な純真さによって貫かれているのは、そのためである。

鳥と昆虫と花に譬えながら、北京の詩人たちを戲画風に描いたこの作品は劉夢葦を楽しませたに違いない。（あごの尖っている、服装がりっぱでおしゃべりな大詩人は徐志摩だということは一目瞭然である）。そして、『小物件』の中で詩の朗読がしばしば行われたのと同じように、詩人たちの朗読会がしばしば病気の劉夢葦の下宿で行われていた。

沈從文の作品の中で、最初に劉夢葦の名前が見えるのは、「北京之文藝刊物及作者（一九二六年一月作）」である。

做詩的而且我都覺得好的有許多。平列起來，如于賡虞，吳默深，劉夢葦，朱湘，聞一多，蹇先艾，馮玉

（至），我喜歡于賡虞的比其他的多一點……至於劉夢葦，受了楚辭的影響，其實這是他自己覺得的。我看他詩求格律鋪叙，有些地方極其雄渾，有些地方就略現著勉強了。他的詩重韻，但他不很會用韻。

劉夢葦の詩作について、詩人朱湘は、劉夢葦の詩を高く評価し、彼の「歌」「我們倆的中間」を伝世の作と言い、また、新詩の形式の確立運動における彼の役割を強調した。詩の内容と形式を無理なく調和させる作詩の技術と、中国古典詩と西洋詩の両方の知識に精通する朱湘が劉夢葦の詩を高く評価したことには、それなりの真実があると思われる。

るが、しかし、そこには、同じ湖南出身である劉夢葦の境遇に対する同情という感情的な要素も幾分か働いているように思われる。それに対して、ここで見られるように、実生活における境遇の類似と親しさにもかかわらず、沈從文は公けの批評においては、公正さを保つ理性を持っていた。

「北京之文藝刊物及作者」の中で沈從文が列挙した詩作者のほとんどは、劉夢葦のまわりに集まった者であった。これら若き詩作者らは、聞一多ら清華大学のグループと合流し、やがて『晨報詩鐫』を出し（一九二六年四月一日）、彼らの努力の一端を世に示すことになる。沈從文の詩作がこの時期に集中していることから考えれば、彼に詩の創作を促したのは、後に詩人になった胡也頻（一九二六年五月には上海に移っている）ではなく、劉夢葦だったと考えられる。しかし、沈從文は『晨報詩鐫』のためにいくつか詩形の整った詩を発表してはいるが、新詩の詩形に拘るこの友人仲間の理論に同調していたわけではなかった。のちに『新月詩選』に沈從文の詩作品を収録した編集者の陳夢家の評にも、そのことが指摘されている。

沈從文以各樣別名散在各處的詩，極近于法蘭西的風趣，樸實無華的詞藻寫出最動人的情調。我希望看過了格律嚴謹的詩以後，對此另具一風格近於散文句法的詩，細細賞玩它精巧的想像……

古典詩の束縛から抜け切れない他の詩作者と違って、誇張のない素朴な口語によって作られた沈從文の詩には、特別な清新さが具わっている。彼は、楚辭（「愛」）や故郷の民謡、伝説（「無題」）ばかりでなく、翻訳された外国の小説『第二個佛佛』（「佛佛的悲哀」）『茶花女』（「曙」）などから題材を採って、作風の異なる詩を次々と作っていった。「北京之文藝刊物及作者」に、

所謂忠實的表現自己，是怎麼一種表現法？我太拙了，說不清。但我可以為自己來解釋的意思，就是用字。好好的！一點也不放鬆的去捉這一刹那或那一長片的感覺來留在紙上，不必照你所讀過的什麼詩文的格律去修辭，他自然會好。

聞一多用韻用得最自然，像熟讀韻府一類典書樣，節令掌故記得非常清白，因其為自然，所以我愛它。とあるように、沈從文は作詩においても、「自然であること」を重視し、感じるままに忠実に表現すること、いたずらに無用の字を付け足したり、何らかの修辭法に執着したりする必要はない、と主張している。

このように、『晨報詩鐫』グループとの主張の違いはあったが、沈從文は十数年後にこの時の回想を書く時になつてもなお、『晨報詩鐫』刊行当時の幸福感に浸っているようであつた。

為辦詩刊，大家齊集在聞先生家那間小黑房子裏，高高興興的讀詩。或讀他人的，或讀自己的。不特很高興，而且很認真。結果所得的經驗是，凡看過的詩，可以從本人誦讀中多得到一點妙處，以及用字措辭的輕重得失。

(談朗誦詩<sup>(註)</sup>)

父親を亡くし、三歳で母親と生き別れて天涯孤独の身になつた(「生辰哀歌」による)劉夢葦は、湖南第一師範の学生だつた一九二二年一月に、長沙で起きた軍閥による労働運動弾圧の際に犠牲になつた親友を悼む、「自由之花」という詩を書いており、一九二三年の五月一日には、『湖南学生連合会週刊』のメーデー特集号に詩を寄稿するなど、労働運動に関心があつた。一九二五年の北京においては、『晨報』付属の『新少年旬刊』の刊行に、周容、王三辛らと共に積極的に関わり、その創刊号(一九二五年七月八日)に運動を盛り上げるための歌を作っている。

### 我們底新歌

你們都是少年我們都是少年，

不似老者已踏到墳墓底邊緣；

我們底前面躺着的道兒遙遠，



道兒上雖則叢叢的荆棘長遍：

我們都是少年我們都是少年，

斬荆披棘是我們神聖的仔肩。

……（略）……

刀劍如雨臨頭虎狼圍繞四面，

我們底耳際充塞著悲歎哀怨；

換得美夢的和平之天國實現，

除非我們熱血染幟頭顱作丸；

還有什麼躊躇我們都是少年！

請唱這支新歌我們都是少年！

『新少年旬刊』は、中国少年衛國団の編集となつてゐる。おそらく、この団体は上海で起きた五・三十事件以降の愛國運動の盛り上がりの中で生まれた組織であろう。その活動には、たとえば、貧困のために就学できない学生を受け入れる「適存中学」<sup>註10</sup>での教師のボランティア活動（「中國詩底昨今明」）なども含まれているのであろう。この新聞において、劉夢葦は國家主義と愛國主義の概念の区別を主張する文章をのせており、また、錢玄同編集の『國語週刊』において、『醒獅社』の復古主義に対して批判する発言をしているように、彼の活動は國家主義団体とは一線を画しているように思われる。一方、『國語週刊』で議論されている漢字廃止論には、時期尚早という温和な反對論を表明し、南京で一年間教師を務めた経験のままとめとして書いた「初中國語教學意見」を発表している。読む・書く習慣を学生に身につけるための方策、文法・修辭學教育や教員による独自の教材の編集など、学校における國語教育についてのその具体的な提案を見る限り、極めて穩健で教育熱心な教師としての劉夢葦の姿が浮かぶ。

『晨報詩鐫』の持つ歴史的な意味を理解するためには、もう一人の主要メンバー聞一多について注目する必要がある。聞一多はその詩が他の詩人たちと截然と異なる男性的力強さを有しているのと同じように、政治活動においても主張を実行に移すエネルギーに満ち溢れていた。彼はアメリカ留学中に、留学仲間と共に「大江会」を組織し、その綱領は、民主・民権を守るために軍閥横行に反対する一方で、国内の貧困の解消には、階級闘争によらない方法を掲げ、国際主義を非現実的であるとし、国家主義を標榜するものであった。一九二五年九月帰国後、彼はさらに、北京の国家主義団体「醒獅社」の李璜らと結束して政治活動を積極的に行った。その運動の中で、ソビエトから援助を受ける広東の国民党に対しても、強い非難を表明し、そして、自分たちの活動を阻止しようとする共産主義団体と時々衝突をしていた。

劉夢葦と聞一多が共に『晨報詩鐫』の刊行で結束し、新詩の理論の構築とそれに基づいた厳格な詩の創作を主張する背景には、五四運動以来提唱されてきた新詩の創作と理論の貧弱さに対する彼らの強い苛立ちがあった。

並外れた学問的教養と芸術的才能を持つ聞一多には、新詩の創作を批判するだけの鑑識力と、詩の模範を示すだけの創作力があつた。彼の『冬夜評論』『女神』的時代精神』『女神』的地方色彩』はいずれも借り物でない彼自身の思考の輝きを感じさせる。そして、彼はたとえば、汪静之の詩集『蕙的風』の卑猥さや『語絲』における彼に対する誹謗などに対して、けして表立って批判することはなかった。彼は新詩の構築理論（詩的格律）と、「死水」などの代表作を『晨報詩鐫』に次々と発表した。劉夢葦と聞一多の結束には、かれらの愛国主義感情につながる、中国文学の破壊的現状を憂慮する気持ちが背後にあつた。しかも、その破壊的状況に対して、無駄な批評を費やすことなく、自ら創作に励むことによって良い見本を示すだけの誠実さと品位を保っていた。

このような創作態度に沈従文は共感を覚えたのであろう。彼は中国文壇が西洋や日本からの理論の紹介や作品の翻訳に頼るばかりで、創作への努力を怠っていることに批判的であつた。彼は翻訳された作品と同じ作風で創作の実験

をする。そのことによって、それらの作品のような作品を書くことが決して不可能ではないことを示したばかりでなく、場合によっては、新しい思想の表れとして喧伝されるそれらの作品の欠点をあぶり出すことさえもあつたのである。<sup>(14)</sup>

しかし、政治情勢は混沌としていて、『晨报詩鐫』が発刊する直前に、あたかもこの若者達の文字への努力に黒い嘲笑を浴びせるかのように、歴史的大惨事三・一八事件が起こつた。『晨报詩鐫』創刊号の紙面は三・一八事件の犠牲者を追悼する詩で埋め尽くされ、聞一多は『文藝與愛國』を書き、愛國のための死を一篇の詩に譬え、また、死を覚悟するほどの情熱を文芸に注いでほしいと主張する。

沈従文は、三月十八日の直後の三月二十日に「堂兄」という兵隊小説を発表している。執筆したのは、二月二十六日である。つまり、この小説は三・一八事件発生前に書かれたものである。

「堂兄」は、沈従文が兵隊に入った年に起こつた事件を描いたものである。十五歳で兵隊に入り、まだ子供っぽさの抜けきれない沈従文に対して、同じ連隊にいた従兄万林は、何くれなく世話をしてくれたばかりでなく、高い志をもつて勉強すること、上司にいじめられても憤慨せずにひたすら仕事に没頭することを教えてくれた親代わりであつた。その万林兄さんが、帰省を兼ねて仲間と軍の食料を運ぶ仕事の途中で殺された。同行した兵隊仲間の中に賭博でいつも勝つチンピラがいて、そのチンピラに恨みをもつていた一行中の別の兄弟二人がチンピラを切つたついでに、口止めのために、それまで恩のあつた従兄まで殺してしまうという事件であつた。

訳もなくあつて死んでしまつた従兄の死を回想したこの「堂兄」という小説を書いていたときに、沈従文は三・一八事件の惨劇を予見していたのかもしれない。彼にとつて、三・一八事件は、賭博的行為を繰り返し、互いに恨みを晴らそうとする軍閥の間の争いによつて起こつた大惨劇であり、従兄が殺された事件と同じ人間関係の構図であつた。やがて、全国を巻き込む内戦、すなわち、三・一八事件と同じ人間関係の構図の、より大きな惨劇が演じられ、

とてつもなく多くの犠牲を払わなければならぬことを彼は予想していた。

『弟自己』要努力——他雖不接著說下去，但我知道，意思是『免被別人欺凌！』

「堂兄」の中の万林の言葉は、沈從文の当時の信条を表わすものでもあった。しかし、無限に続くかのような武力衝突とそれをけしかける者、それによって食いつないでいこうとする者がある。『晨报詩鐫』にはじめて載った沈從文の詩がそれを物語る。彼の見方は『晨报詩鐫』の他の作者とかなり異なる。

夢

我夢到手足殘缺是具屍骸！

不知是何人將我如此謀害！

人把我用粗麻繩子吊著項！

掛到株老桑樹上搖搖蕩蕩。

仰面向天我臉是藍灰顏色！

口鼻流白汁又流紫黑汚血，

岩鷹啄我的背膊見了筋骨，

垂涎的野狗向我假裝啼哭。

三月二十八日作のこの詩は三・一八事件への沈從文の解釈と見てよい。殺された者の死から利益を得ようと算段しながら、泣き声のような遠吠えをあげている者を彼は見たのである。

『晨报詩鐫』は六月十日に終結を宣言した。劉夢葦の作品も生前に発表されたものは、六月八日作で途絶えている。彼は九月九日(註15)に前年から罹っていた肺結核で死んでしまう。蹇先艾「弔一個薄命的詩人」など、彼の死を追悼する友

人の文章には、沈從文の悲しみの様子がしばしば言及される。友人たちは劉夢葦を悼むと同時に、同じ貧困と漂泊の身である沈從文のことを案じたのであろう。十月、『晨報詩鐫』の仲間は『世界日報・文学』に再び結集する。劉夢葦の死の知らせで呼び出されたかのように、胡也頻は丁玲の故郷常德から再び北京の沈從文の側に戻り、そして、この時から創作を精力的に始めたのである。

一九二六年十一月、沈從文は軍隊に入る従弟のために、「入伍後」という兵隊時代を題材にした小説を書いた。軍の資金調達的手段として人質にされた、善良で性格も顔立ちも美しい青年が身代金を払って放免になった直後に、祖父の代の恨みを執拗に報復する仇相手に殺されるという事件が描かれている。沈從文は、この小説において、土着の軍隊が土地の者から搾取している実態を告発しているが、「堂兄」と同じく、この小説でも人間同士の友情を前面に出して描きながら、その対極にある報復心のおぞましさをテーマとしている。平和の時代においては澠刺とした生命が、力による解決を求められる中で、抵抗すらできないうちにいともたやすく消えてしまうという虚脱感を、沈從文は噛みしめながら書いていた。それは、実際の世界で、大革命と称して北伐が進行している中の、無力な人間の虚脱感に共通するものであるに違いない。小説の出だしは、作品の全体的なトーンと異なる悲哀に満ちた調子で始まる。

我有時、還這樣想：在這世界中，缺少了力，讓事實自由來支配我們一切軟弱得如同一塊糶的人，死或不死，豈不是同類異樣的一個大慘劇嗎？

「力」のみによって事実を作ってしまうとする世界の中で、小さき者の「生」それ自体が悲劇になる、という認識から出発して、この小説は書かれた。けれども、この小説は、最後の急転直下の悲劇の発生に至るまでは、社会の悪について深く考えていない小兵士たちの遊び、普通の無邪気な子供と殆ど同じような遊びを描くことが目的であるかのように、全篇を通じて風刺の利いた軽快な調子で書き進められている。

沈從文とは異なる境遇であるが、聞一多是政治情勢の変化により、一九二六年七月には北京を離れ故郷に戻る。八

月、上海の国家主義派の拠点呉淞国立政治大学に勤めるが、翌一九二七年二月には、武昌の国民党の北伐軍の総政治部に入る。そこで僅か一カ月で仕事を辞して再び上海の大学に戻る。四月、北伐軍が上海に入るや、呉淞国立政治大学は閉鎖され、彼は失職する。「心跳」を書くころ、聞一多は病んでしま<sup>注(16)</sup>う。

聽！又是一陣炮聲，死神在咆哮。

静夜！你如何能禁止我心跳？

一九二六年前後の北京の知識人の苦悩をここに見る。しかし、それでも聞一多は歌うことをやめていなかった。

一九四九年、沈從文は精神的崩壊を来たしながら書いた「一個人的自白」<sup>注(17)</sup>の中で、四半世紀前の北京における自らの創作について驚くべき理性的明晰さで語った。

身心多方面的困苦與屈辱烙印，是去不掉的。如無從變爲仇恨，必然是將傷痕包裹起來，用文字包裹起來，不許外露。

我如不逃避現實，聽狹隘的自私和報復心生長，一二十三年後北方的文運的發展和培育，會成什麼樣子？

復讐心の増長を抑えるために、現実の世界で受けた屈辱を意識的に作品の中で洗い落としながら、貧困と屈辱を甘受する奴隷的精神をもって、彼はその文学創作の中で人間の尊厳を訴え続けたのである。

注

- (1) 本作品年表を作るに当たって、『湖南文学史・現代卷』（湖南教育出版社 一九九八年）、『五四時期期刊介紹』（生活・読書・新知三聯書店 一九七九年）、『中国現代文学目錄汇编』（天津人民文学出版社 一九八八年）及び『晨报副刊』『京報副刊』、『京報』付属の各種副刊、『世界日報』（北京）などを調べた。劉夢葦が編集にかかわった

とされる『飛鳥季刊(月刊?)』『青年文藝』の目録は未見であるため、本作品年表は不完全である。なお、劉夢葦についての先行研究には、斉藤大紀『民国北京、若き詩人の肖像——劉夢葦と沈從文』(『火輪』七 一九九九年十二月)がある。

- (2) 沈從文『詩人和小說家』(二) 上海『時報』一九三二年十月五日刊
- (3) 發表誌不明、執筆日については、『沈從文文集』九(三聯出版社・花城出版社 一九八四年)は一九二五年二月十四日とし、『沈從文全集』一(北岳文芸出版社 二〇〇二年)は二月十四日とのみ記している、しかし、作風及び作品中に使われている「虹之国」という言葉が「暹夜」の連作に使われていることから、一九二五年作であると判断する。
- (4) 朱湘「夢葦的死」(『中書集』所収 生活書店 一九三四年)、黎錦明「哀劉夢葦君」(『文學週報』二四四 一九二六年十月三日刊) 蹇先艾「弔一個薄命的詩人」(『晨報副刊』一九二六年九月二七日)
- (5) 沈從文は次のものを目にしていてと思われる。『小物件』李劫人訳 少年中国叢書 上海中華書局 一九二二年)、洪為法「讀都德的小物件」(『創造週報』四〇、四一 一九二四年二月二四日、二月三十日)
- (6) 蹇先艾「弔一個薄命的詩人」(注(4)参照)、同『晨報詩刊』的始終」(『新文學史料』一九七九年五月)
- (7) 朱湘「劉夢葦與新詩形式運動」(『文學週報』三三五 一九二八年九月十六日)
- (8) 『新月詩選』新月書店 一九三二年九月
- (9) 『沈從文全集』十七 二四四頁
- (10) 「我們創辦適存中學的意見」(『晨報副刊』一九二五年六月二十四日)
- (11) 『聞一多書信選集』(人民文學出版社 一九八六年)、『聞一多年譜長編』(湖北人民出版社 一九九四年)参照。綿密な調査と正確な読み解きと適切な引用によって、聞一多の思想と言論、交遊關係などを忠実に辿った『聞一多

年譜長編』においてでさえも、聞一多のこの時期の行動の意味を彼自身の思想に沿って考えずに、この時期の彼の活動を革命に対する誤解として評価している。

(12) 『聞一多書信選集』「致梁実秋」 一九二二年十一月二六日

劉復「罵瞎了眼的文学史家」(『語絲』六十三 一九二六年一月二六日)

拙論「沈從文の初期創作に見られる思想——一九二四年～一九二六年(二)」参照

(14) 徐志摩「一個啓事」(『晨报副刊』一九二六年九月十五日)によれば、九月九日死去。

(15) 『世界日報・文学』十九(一九二七年八月十二日)掲載劉夢葦「慰語」の付記によれば、九月十日死去。

(16) 『聞一多年譜長編』一九二七年五月

(17) 『沈從文全集』二二七 『集外文存』所収。「一個人的自白」は北京における彼の生活と思想を知る上でもっとも詳しい資料である。二〇〇二年十二月全集の出版後初めて発表されたものであるため、拙論「沈從文の初期創作に見られる思想——一九二四年～一九二六年」の(一)～(五)はこれを参照することができなかつた。